



祇園祭礼のクライマックス  
翁鉾と四丁目鉾の曳き違い

翁鉾と四丁目鉾（桐生祇園）

桐生八木節まつりの中に組み込まれている桐生祇園祭は明暦2年（1656）を起源とする祭礼であり、今年（平成24年）で356年の伝統を誇る。今夏、重要伝統的建造物群保存地区となった桐生新町の町立てが始まったとされる天正19年（1591）から65年後のことであり、桐生祇園祭は桐生新町の歴史と共に歩んできたと言える。

祇園祭は新町の一丁目から六丁目までが祭礼の当番町（天王年番町）を受け継ぎ、横町（横山町）を含めて「惣六町」を組織して祭礼を守ってきた。「惣」は共同体を意味するもので、祇園祭礼は新町という共同体を維持する上で重要な役割を担ってきた。

祭礼の中心行事は「神輿渡御」の神事であり、昭和39年の桐生まつりへの統合の際にも、中日の重要な行事として位置付け、現在に至っている。

祇園祭礼では、惣六町がそれぞれに大型の屋台を持つが、さらに大きな特徴として、2台の「鉾」の存在がある。本町三丁目の「翁鉾」は高さ8メートル、典型的な「二層江戸型山車」の様式で上部に翁の像が据えられる。文久2年（1862）の作とされる。本町四丁目の「四丁目鉾」は高さ10メートル、関東地方では無類の大きさで重層式桐生型、上部の人形・素戔鳴命（スサノオノミコト）は活人形師・松本喜三郎の傑作。

平成12年（2000）の第37回桐生八木節まつりで、桐生祇園の歴史上初めて2台の鉾の曳き違いが実現し、その瞬間には観客らの感動や感嘆の声が地鳴りのように辺りに響いた。以来、鉾の曳き違いは桐生八木節まつりの大きなイベントとなっている。

今年の第49回桐生八木節まつりでは、8月4日（土）午後7時から9時30分の間、本町三丁目、四丁目地内で曳き違いが行われる。

（写真は平成18年の曳き違い、左が翁鉾、右が四丁目鉾）